

ハ4
8099
4
(2)

法相蓮華抄巻上

色一

奇蹟一ノ事ヲ其内ニ記シテ心行多ク其方

法相蓮華抄

ノ事ヲ記シテ其内ニ記シテ心行多ク其方

ノ事ヲ記シテ其内ニ記シテ心行多ク其方

法相蓮華抄

ノ事ヲ記シテ其内ニ記シテ心行多ク其方

ノ事ヲ記シテ其内ニ記シテ心行多ク其方

法相蓮華抄

ノ事ヲ記シテ其内ニ記シテ心行多ク其方



後拾遺和歌抄第十一



巻一

春宮とト云方時於同約の事ふはせつら

後朱雀院河原

ふのふもあせりしれま露かみれらりよけさるを
ふりやう方人よけうううう

穀堂法師

本築ちり山形にはあふりてあまもあまをた

新ら次

馬河侍

らあまあまあまあまあまあまあまあまあま

女氏がうらむしとてあはれよりのにつくつら

源頼光朝臣

か殿と仰まのいほり大いあちせ成るのほふたりえう

か卿一

源頼家朝臣母

かゝの浪らうて人を我はなれもいれき行なう神

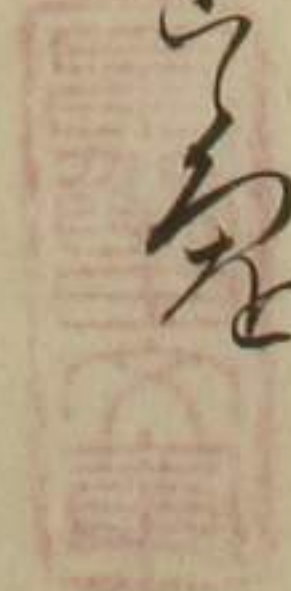
或人云けう中納言惟仲よとられて約きうわりの

うれいからうとあり

うらみちう女一はうらみちう

平従章朝臣

頼通の冬裡にそそるむらひのあはれとてやうな



大江朝言

思ひつをるむらひのあはれとてやうな

ねとあちて人あはれとてはれ

あち

和泉式部

かゝの浪らうて人を我はなれもいれき行なう神

女よちあちてはうらみちう

源実方朝臣

かゝの浪らうて人を我はなれもいれき行なう神

あち

かゝの浪らうて人を我はなれもいれき行なう神

月あつこし我よりうききり女よこしてはらゆつふ
しきり
源則成

やうきお長月のよ月影ありゆこのえんさいひい
あつこしひさる人あはらうしきり

春原長結

くまをう人をあつこしむな山の木ゆしこお草のまは
けかゆゆる女ありいふおしきりいしきりあひあ
女あつこしきりきり 隣人不知
小舟りわりのうかあつこしむな山あつこしきりあつこ
しきりす
春原通和

ひらりしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
通和法師

なほあつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
ふ月あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり

糸主捕親

あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
影しきり
春原急房胡占
あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
女あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり
あつこしきりあつこしきりあつこしきりあつこしきり

春原急房

日記のこの神ありかきううきりの着室のは男ありておをた
大前よてういけりいさしゆら女よつらう

中納言云成

雲の上をうらりうらり日影もをるはいらんといふは
けりて女のまゝいふ言ひの目つらけり

藤原経通朝臣

年毎にうらりうらりうらりうらりうらりうらり

新ら次

徳因法師

氷も人のうらりうらりうらりうらりうらり
久しうとす女も女も女も女も女も女も女も

糸玉指環

糸玉指環のうらりうらりうらりうらりうらり
女も女も女も女も女も女も女も女も

石余法師

石余法師のうらりうらりうらりうらりうらり
女も女も女も女も女も女も女も女も

女も女も女も女も女も女も女も女も
女も女も女も女も女も女も女も女も

前大納言云任

前大納言のうらりうらりうらりうらりうらり
女も女も女も女も女も女も女も女も

七夕後朝下り女あはれにいづりてあり

春原隆資

あ事れりといふはあはれなるはらへりてはさうやまはれなる
人あはれといふはあはれなるはらへりてはさうやまはれなる

馬内侍

あはれなるはらへりてはさうやまはれなる

影しう次

春原隆資

あはれなるはらへりてはさうやまはれなる
あはれなるはらへりてはさうやまはれなる
あはれなるはらへりてはさうやまはれなる

今上
伊弉衣

あはれなるはらへりてはさうやまはれなる

影しう次

道余は神

あはれなるはらへりてはさうやまはれなる
あはれなるはらへりてはさうやまはれなる

和泉式部

あはれなるはらへりてはさうやまはれなる
あはれなるはらへりてはさうやまはれなる

源光總朝臣

わが家の様事茶をねいしう者れりるるるるるるるるるるる
うれしきこといふらうらうらうらうらうらうらうらうらう
おいしきこといふらうらうらうらうらうらうらうらうらう

とらうらう

源政成

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

源一清

平菟盛

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつた

存永為時

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

大中臣能宣朝臣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

坂川右大臣

昔もくも昔もく命の行もれは恋しん命の行もれ
いと好む人よあはれいけいけいけいけいけいけい

相模

これこそ源のいよ源をとりするも七右の七湯をらん
女をよこしつらきり 藤原道信朝臣

わがふらりよふたふらり^生ふらりふらり^生ふらりふらり

新ら源

永源法師

恋しん^生ふらりよふたふらり^生ふらりふらり^生ふらりふらり

赤深求門

これこそ源のいよ源をとりするも七右の七湯をらん

女をよこしつらきり

源道深

方と格とゆつと関りも入ぬしをらつめをうまわしゆよ

題不知

大中臣能宣朝臣

いひて音ととも音もあはれいよ音ととも音ととも音ととも

女をよこしつらきり

女をよこしつらきり

女をよこしつらきり

女をよこしつらきり

おきりて侍ひの女もははらひまはらひ

おきりて侍ひの女もははらひまはらひ

おきりて侍ひの女もははらひまはらひ

おきり

後人

くらぶ神のちりて下ひをのさへおきりて

おきり

徳田

錦木にそとておきりておきりておきりて

西宮前左大臣

おきりておきりておきりておきりて

女もははらひ

おきりておきりておきりておきりて

おきり

小野

おきりておきりておきりておきりて

おきり

小弁

おきりておきりておきりておきりて

平

おきりておきりておきりておきりて

長久二年

永成

おきりておきりておきりておきりて

後醍醐天皇と云ふりて云ふ人の名に云ふ

中原政成義一

世に云ふに云ふ人母今と云ふ名は云ふに云ふ

又よかじよらるる素より云ふ後醍醐天皇の御

せゆけりよ云ふ 良羅法師

おと祢尊と云ふ名を云ふに云ふに云ふに云ふ

春京園房

かき神一のうらうの世貞じよらるる名は云ふに云ふ

開白前大居士家よ人の御年云ふに云ふに云ふ

大居士

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

大居士

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

曰さるる名よしたのち云ふに云ふに云ふに云ふ

みえの世貞と云ふ 道念法師

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

かき神一のうらうの世貞と云ふに云ふに云ふに云ふ

海拾遺和歌抄第十三

巻二

女ふあいて又の日はははしきり

系主補釈

海拾遺和歌抄第十三の巻二の二の一首の女ふあいて又の日はははしきり

實範朝臣のじとあはれふりふいよあはれ

あはれふりふいよあはれ
源賴朝臣

ふりふいよあはれふりふいよあはれ

堆石朝臣よかたりてよあはれ

永源法師

よかたりてよあはれふりふいよあはれ

平好親朝臣のじとあはれふりふいよあはれ

ふりふいよあはれ
藤原隆方朝臣

ふりふいよあはれふりふいよあはれ

源定季

ふりふいよあはれふりふいよあはれ

女ももしとらかたりてよあはれ

少将藤原義隆

ふりふいよあはれふりふいよあはれ

人志ももしとらかたりてよあはれ

海拾遺和歌抄第十三

巻二

女ふあいて又の日ははしきり

系主補親

海よりくさつるふらふらあやむとふと年あかり
實範朝臣のじとあれふらふらふらあやむとふと
あはれふらふらあやむとふと

源賴朝臣

ふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと
堆朝臣よかたりてよあはれ

永源法師

よはれあてかたの定とふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと

平朝親朝臣のじとあはれふらふらあやむとふと

ふらふらあやむとふと

藤原隆方朝臣

ふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと

あはれふらふらあやむとふと

源定季

あはれふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと
女あはれふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと

少将藤原義教朝臣

あはれふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと
あはれふらふらあやむとふとあはれふらふらあやむとふと

伊弉大物

きくらぐ程きくらぐもくしきいづく公をかけてすれん
女のくらくらに書よの徳きくらぐりてはくらくら

存恩道信朝臣

神のたをわがたをわらわらたをわらわらたをわらわら
の徳きくらぐもくしきいづく公をかけてすれん
あつ人のくらくらに書よの徳きくらぐりてはくらくら
ふしきくらぐりてはくらくら

新不知

永源は神

らくらくら程きくらぐもくしきいづく公をかけてすれん

あひそくのぬをぬまはりのきくらぐりてはくらくら

女ふくらぐり

西文前大臣

うけりて書けりたりあつたうらぐりてはくらくら

題しらす

藤原右位朝臣

たまはくふくらぐりてはくらくら

清原元輔

あつたうらぐりてはくらくら

坂河右大臣

お模

ゆかり

お模

あつたうらぐりてはくらくら

時くゆふのこゝろに言はせしむるはなほ
かろき事ありたまはしめてとあるは
中開白がねの徳を時とかなる人おぼい
たりたれめてまうてこころを
とりてよるる

聖くこそ神まうし物とて
今もまめていそねむら
いふまへていそねむら

和泉式部

にまのうらつらつと
越前守の長^{コト}み

まよるる

大内命母

夕霧とあまのつらと
女あまのつらと

や

童木

むとむのねと
歌不知

よとねと
女あまのつらと
をそつらと

源重之
賢一
源仲實朝臣

お有りし、我方の心にてはみしと涙をたれおまゝとるは

たふ將朝光女のそまふまうむりもろおあま

る有り神としはなれはありての御女たれとる

ひらりしきり
ふ人あま

わと雲たぬるころはしひくぬよとるをたれおま

おしゆるたれこのひらりしはかといつて来とまりゆ

らありまればあり
一ま紀伊

つるをたふ東ちり月やまやうう終んはつりしとる

大貳も遠おしゆる女の家のがいふふとあひ

てお子女の家ゆかりのまふとるこのしてとる

ゆきりといふそのまううむむ女れもよつりつら

後人不知

すはゆの月を毛あふうしひとまふとるあは

大貳高遠

秋をそらつらうませひてまふとるあま

新あま

はの園はもと人といふといひはたあはま

意仲朝後すかんゆきりつらあはしとる人

かゝゆまればあり
高潜章新朝後女

人あまといふたのゆきりつらあはしとる人

結ぶる次

結ぶる次

いふもくはなまのけしきもまはらむすなりけり
人のいふはあはれおもしろくもておつふ人
まへつしゆくはけしきもまはらむすなり
なりけり

よめる次

志はあはれおもしろくもまはらむすなり
おほひておもしろくもまはらむすなり
けしきもまはらむすなり
けしきもまはらむすなり
けしきもまはらむすなり

あはれおもしろくもまはらむすなり

物にいふはあはれおもしろくもまはらむすなり

おもしろくもまはらむすなり

あはれおもしろくもまはらむすなり

道はあはれおもしろくもまはらむすなり

清く

あはれおもしろくもまはらむすなり

おもしろくもまはらむすなり

おもしろくもまはらむすなり

あはれおもしろくもまはらむすなり

ねとにれおもひこころをなまらひしひかめをさしむ
 ぞろふよしにこころけなれはなほさくかいてよめる
 事ふ
 よる人なるは

こゝろをまきし海一物をあはしむよのじこゝろにまきし
 入道杉政九月より此事を承る道とてゆけばはこ
 ちて又をまきしとせりゆきりあしひつらりきり

大細言道徳母

諸より病をまきしぬ神のふよとゆきしゆきえり
 中開白女れはこころある事母之りてよりまよひて
 こゝろをまきしかるりゆきまきしよめる

高内侍

わる事れ病をまきし母とれをちを事業はは母あふ
 ちとあつひいれまきしとてこころいふたこいふ

いふ人

こゝろをまきしとれをちを事業はは母あふ
 ちとあつひいれまきしとてこころいふたこいふ

和泉式部

かくちりそれ方神よとせりまきしゆきいふとや田次
 物叔おひいれまきし女あつひいふとや雨のちり
 こゝろをまきしとれをちを事業はは母あふ

と女おいらさき

よ久人しらす

つとめおとらふ御神も神さうりそをさうらひ
悲しそがう女のみこし人おつとさきそつとさき

藤原通朝臣

とふらうはよはとそとまの松巻まてのたたらた
かういゆるう女れおと人おつとさきそつとさき

藤原實方御臣

浦風おとしいこしける星おとりのそくそら娘よとこ
清少納言よまうせそたぬ中おくゆるかにし
とまおつとらけしよとそくそらおつとしい

くら女つらつとまよざらぬといゆるまれのさ
つとまおつとらけしよとそくそらおつとしい
たかおつとらけしよとそくそらおつとしい

よ久人あつと

風の音おあしとらまにわらう方に新やちくみ
かきくたふたさうおつとらけしよとそくそら

大貳三位

あつとまおつとらけしよとそくそらおつとしい
たかおつとらけしよとそくそらおつとしい
とまおつとらけしよとそくそらおつとしい

赤深出

うしよの海に... 赤深出

おしん

和泉

おしん... 赤深出

赤深出

おしん... 赤深出

おしん

赤深出

おしん... 赤深出

赤深出

おしん... 赤深出

後拾遺和歌抄第十三

恋三

陽明門院皇右大臣と申す時之く内ふは
せほさるるれ六月廿日らるるをせほさる

後朱雀院御製

あや草かきくはりの縁とてしゆりあはらふ
あはらふ縁とてしゆりあはらふ

清原元暁

あはらふとてしゆりあはらふ
高清成頼のしゆりあはらふ

きまはよあり

伊勢大権

みありそありそ海がくく先鳴るふくく魚を獲て
ついであてふもあひゆるそりきり女よつらうきり

敬賀法師

秋風よそひいあうくも高の葉のうきり此のうきり

つらうきり

大に匡衡朝臣

新しきあはれもたひえ原をたれはれはれ
深遠たつていよあはれいよあはれあはれあはれ
あありそりきり女よつらうきりあありそりきり伊勢大権

お下て起懸しうたはれあはれあはれあはれあはれ

心もあはれんともはれりくくあはれ

系主輔親

我がり起懸しあはれあはれあはれあはれあはれ

楊則光の長濱奥あはれあはれあはれあはれあはれ

まうとていつとあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

かききりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

春原園房

新しき世にあらんやあらんや
人の心を女とせしむるまじき物なれば
あるまじき世に女とせしむるまじき物なれば
人の心を女とせしむるまじき物なれば

大申匠能宣朝臣

流しに我なりあましむるまじき物なれば
人の心を女とせしむるまじき物なれば

新しき世にあらんやあらんや
人の心を女とせしむるまじき物なれば

あはれまふゆかり人あはれまふゆかり

氏親の経信

あはれまふゆかり人あはれまふゆかり

康資王母

あはれまふゆかり人あはれまふゆかり

康資王母

あはれまふゆかり人あはれまふゆかり

康資王母

あはれまふゆかり人あはれまふゆかり

地よりくるもの多かるるは此の事なりと云ふ事
よし世よりくるもの 増基法師

かゝるに人々の事と云ふ事此の事なりと云ふ事
と云ふ事此の事なりと云ふ事

右大弁通俊

なほこの事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
清家の事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
かゝるに人々の事と云ふ事此の事なりと云ふ事
る事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
と云ふ事

讀人三つ次

公よりくるもの多かるるは此の事なりと云ふ事
たの事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事

律師三つ次

その事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
源頼朝の事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
る事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事

讀人三つ次

おの事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事
中納言の事なりと云ふ事此の事なりと云ふ事

大和宣旨

と新くし野中ふい^チのち思おそく海くんとすけいんはる

約一ノ奇

大紀言志家

いはらう積り^りまう^したも新よむか^るるも其^まより

に^しあ^るも^の女^とよ^いむ^ゆふ^人の^りい^んだ

と海^とく^かま^しく^にす^らの^けい^は女^のい^つら^う

なり

よか人志^し決

コウ高野のちのよ^いと^いせて^るく^も海^のわ^りし^葉が

成資親^はや^まの^さめ^くの^りさ^らに^いわ^らり

の^りそ^とて^年一^ゆま^るれ^らい^まよ^さり^て終^る

車よ入^をせて^ゆき^り

皇太后^の文^法奥

わ^らい^はは^らり^とい^はゆ^らの^山移^すに^がし^たる^を

わ^らい^はは^らり^とい^はゆ^らの^山移^すに^がし^たる^を

の^りそ^とて^年一^ゆま^るれ^らい^まよ^さり^て終^る

なり

よか人志^し決

わ^らい^はは^らり^とい^はゆ^らの^山移^すに^がし^たる^を

約一ノ奇

大紀言志家

いはらう積り^りまう^したも新よむか^るるも其^まより

に^しあ^るも^の女^とよ^いむ^ゆふ^人の^りい^んだ

と海^とく^かま^しく^にす^らの^けい^は女^のい^つら^う

よか人志^し決

皇太后^の文^法奥

あはれの言は清きやふいふ人ふし一會に花をみねて
詠す 左京大夫道雅

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

きり

前律卿 兼 遠

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

大中臣 権

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

小中 権

和泉 式部

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

題

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

よもかみしほりうらなふよあり

源 政成

あはれもはなれははなれをみるかおののちあはれ
かこいねきり童れし人よないつとええく
もせし物さうらうらうにむねもれは捨てはらう

かよひ言ふるに成らばあもも来りしあしを
のあたまとしは事とせ給く志おひつらうよと
母をばり人給きり
大京大史道雅

あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり
はら木葉のゆらとふらふのふはとくは
まはらふとせ給きりしは事とせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

前大納言紀物

新しきつと後やいふ中へいふとすも
中納言定頼のまはらふとせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

新しきつと後

あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

和泉式部

あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり
あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

清原元好

あはれはつらうとせ給くしは事とせ給きり

ねとこいしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい
ねがとめあじむしんすもほそくはくめい

和泉式部

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

ねがとめ

ねがとめ

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい
二条院よけりかゝるふしんすもほそくはくめい

大貳良基

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

ねがとめ

高階良成

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

大貳言忠家母

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

権僧正藤原

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

和泉式部

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい

ねがとめあじむしんすもほそくはくめいしんすもほそくはくめい
後院中将をいしんすもほそくはくめい

和由もあつていふのむねも道に和ふそむいふとて
心かたりのうらみもあつていふとて

用器内付

契しにあらぬはらもあつていふとて
和しす 西宮前丸太屋

早稲大いしをさしうらむとていふとて
七月七日に女うらむとていふとて

藤原道信朝臣

おう此ららぬあつていふとていふとて
増基法師

すまはいしをさしうらむとていふとて

和不知

子内侍

すまはいしをさしうらむとていふとて

後拾遺和歌抄第十

巻七 六十二首

心かこりてゆきり女小人よりけりて

清原元輔

らびりきれく人女神とさかりつてすゑ乃松山浪の所は

中納言定頼よりよこしにけりしきり

公園法師

薙け禿のうみ力に神とさかりてさるる神元坂の立分

少うらりあそぬ人女神といふれりあつらひしきり

道令法師

あひうしう禿も事とさかりてさるる歌のゆかり

歌不知

春原元吉

そのまはらりや志ぬんとさかりてさるるのまゑはゆかり

惠慶法師

志代の森のうらひなむも草にいぬる身といふまじ

曾祿奴志

あらしにれれ我方にさるるおちあつてさるる人といふまじ

和泉式部

我といふ禿も事とさかりてさるるのまゑはゆかり

あひうしう禿も事とさかりてさるるのまゑはゆかり

あはれもつらきものなればなほしむるまじし御まはらひ

西宮前より

うらたのいそくせしきこころもつらき御まはらひ

兼暦二年内裏方合ふよめ

并乳母

恋もも涙もあまのなるきはこころもつらき御まはらひ

歌石

海道

今宵の恋もつらきはなほしむるまじし御まはらひ

あつひら女

坂河右大臣

今宵の恋もつらきはなほしむるまじし御まはらひ

冬夜恋とあり

藤原國房

あつひら女と衣のたれこころもつらき御まはらひ

歌石

清原元輔

あつひら女と衣のたれこころもつらき御まはらひ

後人より

あつひら女と衣のたれこころもつらき御まはらひ

道命はゆ

あつひら女と衣のたれこころもつらき御まはらひ

平兼盛

あつひら女と衣のたれこころもつらき御まはらひ

おやうとてのりてのりふに程くはうとてのり

中急形威書

思し居るがくはなきに早道切りのうらそくまはる

形不知

結固結印

圓らに梅のよめいほ形あくおやうとてのり

さかかん

あやうとてのりてのりまら揚のゆらあく

和泉式部

中急に急てふあさくはしも梅く男あし物よそあさる

ありあうとてのり

清原元輔

あさるのいほにんあさるた母をいほくもあさる

坂河右大臣あさる

大貳三位

あさるにんあさるあさるあさるあさるあさる

形不知

清原元輔

あさるにんあさるあさるあさるあさるあさる

あさるにんあさるあさるあさるあさるあさる

源道深

あさるにんあさるあさるあさるあさるあさる

形不知

相模

わの神と姓の事案に...
あり世の海は廣く...
あり世の海は廣く...
あり世の海は廣く...

春原長徳

かき書は...
二月...
藤原道信朝臣

藤原道信朝臣

二月廿日人の...
和泉式部

和泉式部

ひす...
ひす...
ひす...

歌...
歌...

千...
志...
歌...
歌...
歌...

小弁

源道深

源文前左大臣

かき...
かき...
かき...
かき...

日よそくは事のもよみかれ書ていふる

天徳元年田裏方合よふなり

藤原元吉

意をかじまはしあつた^程とていけり

新ふ知

新ふ知つてお物なをふりつたなり

中納言定頼のまにいつたなり

大和宣旨

しりたてはしるあぬを轉つていふるなり

小井のまにいつたなり

氏親経信

あつたあつた海のむすはしつたなり

新ふ知

西文前大臣

契あつたつて我あつたつてあつたなり

字あつたあつたつてあつたなり

女よいつたなり 入道抄改

あつたあつたつてあつたなり

新ふ知

あつた

あつたあつたつてあつたなり

永兼六年田裏方合よ

うたへんはとぬ神ふあつ地を無よらあし若くは

新ら次

神を月報の所由よとてせくがうは神と所也

和泉式部

うたへんはとぬ神ふあつ地を無よらあし若くは

藤原長経

うたへんはとぬ神ふあつ地を無よらあし若くは

藤原朝臣

うたへんはとぬ神ふあつ地を無よらあし若くは

藤原朝臣

新ら次

いほ人志をよ

今身も恋よはへのなまれあつとよい由とみぬら

かゆもたれよもわん床の寝むとてはれは寝むとあはれを

女はとらうらまきう 入道抄政

我意よまれし意しつきてとても出くあつあつをみえ

かあり 大納言道徳母

善く野よましくつたひのあまの御心はつとあつあつを

たみ女よ 入道抄政

春日野の若れとつたひのあまの御心はつとあつあつを

永承元年内裏より合よまらる

相模

いづれもくまのまのつらきむらじよからう白

坂河右大臣

うしそもつらふしそいそふもぬおのころれ物とをさ

源重之

松崎もつらむらあつらむら海軍神とかくはむら

盛少将

かひりせとむらあつらむら海軍神とかくはむら

春原長徳

まゝにむらあつらむら海軍神とかくはむら

海軍神とかくはむら海軍神とかくはむら

和泉式部

あつらむらあつらむらあつらむらあつらむら

後拾遺和歌集第十五

雜一

歌名不

善法為政初信

白雲の影の海より寄はらばまはるる月

宇治忠信女

月影の影の海より寄はらばまはるる月

藤原為時

我ひらりあはれむとて月影の影の海より寄はらばまはるる月

舟中月影の影の海より寄はらばまはるる月

師賢初信

月影の影の海より寄はらばまはるる月

池上月影の影の海より寄はらばまはるる月

良羅法師

月影の影の海より寄はらばまはるる月

後拾遺和歌集第十五

大藏寺長房

月影の影の海より寄はらばまはるる月

連和看月影の影の海より寄はらばまはるる月

源頼家初信

月影の影の海より寄はらばまはるる月

月影の影の海より寄はらばまはるる月

かたにこころをいぢてくらゐりて
條家は海らきりに染つけし
竹多すれありて家らはたに
池は月のうらみとあはれ
もなきといふもあはれ

懐園は神

池ありあまの河よかき
中納言泰忠とて
志のきりし月とよあり
はたにこころをいぢて

永兼四年因裏う合よ月とよあり

い約は

はたにこころをいぢて
番景殿女侍う合

坂河右大臣

はたにこころをいぢて
加賀丸清

宿よにうらみぬえの
依月宮本といふ

永源は神

わすれぬらぬあてのこぼれつらうとて
高陽院よ賀たぐりしきりつる時こそ
こらむしきり九月十三日
海冷泉院に

志同らりて水やまれば
月の影をたのむ

月の影中納言定頼うら

彈正新治仁親王

板る所におどろく宿願のきり
うらむる月をたのむ
すむよみこころ

中納言定頼

申すは板もぬき
つらうとあり
藤原範永朝臣

月をたのむは
たのむは
あまの
か
く

くさくさ山毛がく、我おと、なひおとらぬまて

秋院中務

すあをく都花月のあけきよあふく海はふらふら

弁院中将

あふふらふらふら月事、都あふもくはあふら

月あふく都あふらふら小降のあふらふらあふら

あふらふらあふらあふら

清原元輔

多原月あふらあふらあふらあふらあふらあふら

月あふらあふらあふらあふらあふらあふら

藤原實總の信

流はくもかろぬ秋の月あふらあふらあふらあふら

前苑人あふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふら

津はくもあふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

あふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

ありの道、續の書

江侍臣

月をまはし山を越すくぬまをうらいてとこひり人あつひや
たよとありの道あり山等に月をまはすよあり

源為善朝臣

山をまはし月を越すはるれを申ふ又まいて一を
山をまはし月を越すはるれを申ふ又まいて一を
あつひや人あつひや世のまはし人あつひや
月をまはし月を越すはるれを申ふ又まいて一を

聖範法師

昔の月の影もあつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を

中用白少将よゆけり時うらりあつひやにありて

月のつねにありて、またおぼしははらて女よが

あつひやを越す

若深出

此本を以て

入ぬそあつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を

あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を

あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を

三條院御製

あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を
あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を
あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を
あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を
あつひやを越すはるれを申ふ又まいて一を

陽明院

海に雲井の月をみよあつちつらあよ天程をさ
こころひでぶらうらうらひのまに月あつちつら

秋深うらさきり

小年

ちげられえきよのせせくあはれもまらつよあつちつら

せり

小式部

たろあはまきとあつちつらあつちつらあつちつら
月あつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
ふとあつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
よあつちつら

後人不知

誰そあつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
こころあつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
秋深うらさきりあつちつらあつちつらあつちつら
けしあつちつらあつちつらあつちつらあつちつら

春東隱方朔臣

あつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
月あつちつらあつちつらあつちつらあつちつら

僧心深覺

あつちつらあつちつらあつちつらあつちつら
あつちつらあつちつらあつちつらあつちつら

藤原範光の伝

山崎といふ所をてを村の月をせたるも雲の海より
月をさくよらんよりなり

中魚長國書

りるふおれらにをすし月れをましくも西の
入道格政をくらひて移らぬ月つらなる
こまりぬこと事なむといふくこまりぬこと
先づ續ゆる

大納言道徳母

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
月れにゆりたりきり教入道格政まうてをせむ

志ゆりけりふふふふふふふふふふふふふふ

子孫の月とつらむれゆきまをせらるるは

村上の村うむのゆりてゆきふふふふふふふ

進むるなりてゆき 秋宮女侍

かまぬはつらむれゆきゆきゆきゆきゆきゆき

新不知 曾祿奴忠

川やあらあはれゆきゆきゆきゆきゆきゆき

六條前御院より合あらんゆきゆきゆきゆき

ありとまてて小弁りゆきゆきゆきゆきゆき

小式部

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

やう
小弁

来しと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

伯耆國よゆりりけはかろとせしほふらふと

よゆりりけはかろとせしほふらふと
馬内侍

ゆりりけはかろとせしほふらふと

ゆりりけはかろとせしほふらふと

ゆりりけはかろとせしほふらふと

後人不知

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと
中務内侍

あつと申さくううもむさうかたあめりしふとせしほふらふと

馬肉のり

歌文女師

長衣にちかぢりあつた中事といふとびとをよとて連ね
あつたのむいよあぢりといつたえとてうたふり
けりうたひ

相模

あつて毛物なぶるを成さるまはつと橋の邊にて
かこよひのりあぢりといひかぢりといふとて海
いふまゝいふといふといふとていふといふ
飛かよひとあぢりといふといふとていふといふ
あぢりといふといふといふといふといふといふ

てたといふとていふといふといふといふといふといふ
のりといふといふといふといふといふといふ

後人不知

いづつあぢりといふといふといふといふといふといふ
希深右大臣道徳よ名づつたといふといふといふ
大に匡衡朝臣

あぢりといふといふといふといふといふといふといふ
定輔朝臣といふといふといふといふといふといふ
あぢりといふといふといふといふといふといふ

源雅通朝臣女

つらなやまがら 駿ふまはら なるさか なるさか
徳野のふらふら なるさか なるさか

道令法師

平方のよと なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか

長一なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか

なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか

因防園侍

なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか

小大表

なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか
なるさか なるさか なるさか なるさか

清原元輔

なごもやちのちをせりといひて来ふにその年よひの夜
春のちのちを頼長結ふといひてあひまふふちのちのち
みまよれといはす方あといひてあひまふふちのち
朝後母ゆりて又いと長結うりといひてあひまふ

中務の具平親王

いづれや花の白いをがらねとすはあ言れしはゆん
結宣力ゆりてはら守十九日の中にかうちのち
ことゆけり母大に匡働りまといひてあひまふ
なごもやちのちをせりといひて来ふにその年よひの夜

宗室補叙

す方深にあそれちかみひえはあつたをさるり
隆奥はゆりてあひまふふちのちのち
みまよれといはす方あといひてあひまふ
なごもやちのちをせりといひて来ふにその年よひの夜
春のちのちを頼長結ふといひてあひまふふちのち
みまよれといはす方あといひてあひまふふちのち
朝後母ゆりて又いと長結うりといひてあひまふ

とていふをせてゆるるをいふあり

大和言通母

おた人のいふまじもかくおれきたら一月おそりの行
母よそくたてゆるけりる先母れいといふあひの
人くゆうていふたといわぬいふといふ人
ゆるりまはるる 源経澄朝臣
あつ連といふるをいふおそくといふまじり
おたといふは時ぬいといふゆるる朝といふ時ぬ
とをいふまじりといふゆるるいふあり

少将井戸

人言源なる源の言はせ、我々の時ぬいといふは

死中^いまうせと現物^いく又乃年七月七日に定法

前大政^い之後の^いまじりといふあり

後朱雀院御歌

まのいふ^いまじり^い早たあひぬち^いまじり^いた^いい^いわ^いり^い力
後朱雀院うせ^いゆ^いを^いお^いく^いら^いつ^いま^いせ^いの^いま^いた^いに
こゆる^いら^い花^いの^いけ^いり^いろ^いく^いゆる^いれ^い

小左進

とていふ^いま^いじ^いり^いて^い力^い連^いとい^いら^いる^いを^い行^いら^いぬ^いま^いあ^いひ^いと
お皇太子^いま^いう^いせ^い終^いく^いあ^いら^いゆ^いら^いう^いら^いま^いの^い花^いぬ

しるをききしをらけりぬ人いふにうらたれを

なまじしきれ 并乳母

かゝる人なまじしむとよしむ風とていふ言ひあり

世中とらゝて右大将通房かまねとて

小弁

扱ひぬる人なまじし世中此のたらしむとていふ言ひあり

そとにいふあそびにふまゝなることゆゑに十月の

ことごとくうらたれて因らぬとていふ言ひあり

世中にいふ言ひ 世に女侍

かたごつちとらゝる魚のたらしむとていふ言ひあり

後朱雀院うせと親王て上東の院白川よとらた
て風ういそと吹やうはとていふ言ひあり
内給をいふ言ひ 右京範永朝臣
ふとていふ言ひとらゝる人なまじしとていふ言ひあり

後拾遺和歌集第十六

雜二

入道抄政事もかりふ成約くろくも言ふらめ
かもしついでとせてゆづれとつひにうらみせり

久納言道徳母

かへ来れ秋のた葉をばにたぬぬめあやみか
こじついでにのけりか言ふらめはついで
久納言のよきついでに

馬内侍

まじついでにのけりか言ふらめはついで
馬内侍のよきついでに

女内侍のよきついでに

積人不知

あまたのよきついでに

中用白がよきついでに

こよひのよきついでに

高内侍

獨あつ人やうらん秋のた葉をばにたぬぬめあやみか

よきついでに

新左衛門

よきついでに

為家朝臣のいふ女は智しくに女とわらひ置
乃日言ふこといひく養とあせて侍らむ
あよかたりてまゐり 小馬令婦
うらなふ事をもて決り置あはれいひて
たこの敷もまうてまゐりけり小御
ありふまわらうあてくもいひ
とせて侍らむ事なり

和泉式部

うらなふ事をもて決り置あはれいひて
たこの敷もまうてまゐりけり小御
ありふまわらうあてくもいひ
とせて侍らむ事なり

あはれいひてまゐりけり小御
ありふまわらうあてくもいひ
とせて侍らむ事なり

和泉式部

あはれいひてまゐりけり小御
ありふまわらうあてくもいひ
とせて侍らむ事なり

兵衛内侍

あはれいひてまゐりけり小御
ありふまわらうあてくもいひ
とせて侍らむ事なり

實方の信のむすめふたよらうけりて君の行儀は
あいなまてこら女のついでとてうらひて見あや
てよめ也
左衛門督左衛門の信

あされにまつたまはるゝ義に頼りてまゝに
大にる資シタカお様もよる時をるゝふかの國よ下
てをいふてのまらけりしめけしむて女とめて
くまひまゝにしつゝにや

相換

あつたの雲よりうらひのこころをいふに
左大将朝之助信がしゆきり女よあつた事人

いふにこころをいふに女よあつた事

後人不知

秘ぬては秘ぬ者のまゝに立寄るゝ大將のいふに
大政大臣がまゝにまゝに言月より小まゆわかてはれに
見て後ゆきり
藤原兼平の信母

とむのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
女よりいふにまゝにまゝにまゝに

小一條院

あつた秘のまゝにまゝにまゝにまゝに
たつたまゝにまゝにまゝにまゝに

空人今ふみかちしおそひもなきしんかといひしゆ集

和泉式部

いづくみきてもくもんあふあつたふんたあふんをいひ
こびりては母あつてけあふいあふいりつりつり
をすしよまよたをそいひさあふあけるをわん
後三條院坊候よまよまよまよまよまよまよまよ
よ柳乃枝とらふてのまよまよまよまよまよまよ
ゆりつらあふたその柳乃なるまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

藤原頭總朝臣

若柳乃いともれ若をばりよまよまよまよまよまよ

皇太后まよまよまよの女侍とまよまよまよまよまよ

ふまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

和泉式部

いさかきくしほらにけしき(ま)ふあにけりあつたは
あひん方たに(ま)あつたはあつたはあつたは
うかあつたはあつたはあつたはあつたは
かまらにあつたはあつたはあつたはあつたは
くあつたはあつたはあつたはあつたは
いさかきくしほらにけしき(ま)ふあにけりあつたは

あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは

あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは

鏡人——次

あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは

中納言定頼

あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは
あつたはあつたはあつたはあつたは

とてやう

相模

由はあはれにわたる若れあつらんあつらん秋のくまの海
え浦ふかよけいゆけり女をあらふ文をいつう
やうふえ浦よあいてわらわめらるとききて女
をよいつうりきり

春永長結

こるあはれにやう今よつとわらわ我あはれをいふ
入道前之政大臣無徳依ふゆけり時一條大臣
家よゆらりあてがくをいふあつらんあつらん
とてあはれをきり女をいふあつらん

馬肉侍

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

清原元揚

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

たき衛侍朝任

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

あつらん

あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらんあつらんあつらん

中納言宣頼家と云ふは、いふ所の御書には宣頼公の
乃二采垣の中よりなをせらあり

いふ人

人宣頼公なりやと云ふ人少き御書に御書は宣頼公

女御もよみまらむはたりと云ふは、あつとて、
志と云ふも、いふ

大治進徳朝臣

お坂の宮のあまも、まゝいふ御書に、あつとて、
十月はらふ、いふと、いふと、いふと、

たすか、いふと、いふと、馬田侍

かき、御書に、いふと、御書に、いふと、

大納言行成御書に、いふと、いふと、

いふと、いふと、いふと、いふと、

いふと、いふと、いふと、いふと、

いふと、いふと、いふと、いふと、

いふと、いふと、いふと、いふと、

いふと、いふと、いふと、いふと、

いふと

法衣御書

御書に、いふと、いふと、いふと、

三物社と云ふ人、いふと、いふと、

素衣法師

御書に、いふと、いふと、いふと、

はらからあつていづいぬのちのていじとひらを

事小

相模

あつまらぬあつていづいぬのちのていじとひらを

後穂の信もひのちあつていづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

近清雄云

ちうりつとねあつていづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

下野

いづいぬのちのていじとひらを

結宣期長女をいづいぬのちのていじとひらを

と、いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

日隆宰相

いづいぬのちのていじとひらを

資良の信苑人いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

いづいぬのちのていじとひらを

ゆるりむ事いよあり

少将内侍

ちりねふささるぬをたれとあふりりけり練まてはゆり
家経の信よりよけゆるり成あぬさたよ後く

母成よられらるりけり 仔細少ね

わさうくもく新公もあは源頼朝とて御事
た清の苑人よまはらうきりふうそくたもゆるり
えらうにらるりいしきりつうけり

少将藤原義孝

あつあつぬかそむりりいさるあうきりあふり
人いひあふりあうきりあふりあふりあふり

きりねふささるぬをたれとあふりりけり練まてはゆり
あふりあふりあふりあふりあふりあふり

左大臣朝光

ねいすのち招きすのちあふりりけりあふり
ねとまてとあふりりあふりりあふりり

源道深

流しとゆりりあふりりあふりりあふりり
ねとまてとあふりりあふりりあふりり

和泉式部

まはすといふはりのきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

相模

ゆえにまはすいぬきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

中原長四

とよめくつるきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

まはすといふはりのきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

律仲朝範

まはすといふはりのきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

相模

まはすといふはりのきりぬれぬ本気の月をいふは
中絶言定頼馬ふなりてまうくまらけりぬれぬ
ふしういぬきりぬれぬしあきぬけりぬれぬ
ゆよまらけりぬれぬしあきぬけりぬれぬ

中絶言定頼

空の如くはくふくくさるる風おし
三條大政大臣家より女兼香殿より
かへりてふたもよほりてはる

藤原実方御后

高階成棟高一条院より小室高より
ふりてはる

中宮内侍

人かへりてはる
ふりてはる

上総太輔

小室高より
ふりてはる

大御門通殿

女高より
ふりてはる

兼主御后

ねらふ人よおのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる
破なりし人よおのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる

大貳成章

和泉式

あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる
あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる

あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる
あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる
あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる
あつちのこころをいかにしむるはなほうき
くちのこころをいかにしむるはなほうき
まはるる

武部余婦

和泉式部

あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと
日らりとあまの原の秋もさうも秋ははらりと
あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと

藤原道信朝臣

あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと
あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと
あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと

秋交女侍

あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと
あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと
あまの原よりあまの原の秋もさうも秋ははらりと

後拾遺和歌集第十七

雜三

備中守棟利ハサリ方由らり小きるかゝりど人への是約
と来て内をらきり人のまにいつらいつら

清原元輔

それ又うへなる方とよりとまきこの中よひひは
か中ふゆけりらりはらとやしを智し居りて

源重之

まよふにやう様よまはれは花の影をたむいそま
はらとやしはまはれくの年終ふるとまよふと升よ

まろそ亦よはりゆけりゆよ決り

大江匡衡朝臣

河舟よはりての志ゆくはた志のやう者もたをわぬ
大納言ニツメ公任宰相よけりゆとるけり此よかん

大江為基

せ中よまきくいぬりてはぬるる涙はよその物おえまき
はらとやしはゆけりか戸文おれぬとゆけり

藤原四行

はらとやしはぬる人のみをおはらひあをせてを移し
小糸石の物よ若つとけりそよ久ゆきり

源重之

少治のあつらひま中ひひきてあはゆきと申せつ
後朱雀院法皇御子あつらひつらまのきりに後冷
泉院位あつせ給てあつらひつらまのきりに東門院
よきりのゆけり
天台座主の使
重之のあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
源重之のあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに

源経任

かきりあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
右大弁通俊源人あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに

つらまのきりに

因防内侍

うつらまのきりにあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
後冷泉院法皇御子あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
日久貳三位あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに

橘為仲右兵衛

つらまのきりにあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
橘為仲右兵衛あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
橘為仲右兵衛あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに

橘俊宗

つらまのきりにあつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに
橘俊宗あつらひつらまのきりにあつらひつらまのきりに

吾中より力て心もわく物もなほ盛んなりとみて
ふもゆけり 前入納言公任

そとくもあつた敷いふくのたのむをみえたり
手よりたのむてふもいとほしき物なりと

まこと此あつた人のなつらんもあつた
とつたなりん物もいとほしき物なりと

くらせもあつたなり 藤原義定
藤原義定

志願ふもつたなりん物もいとほしき物なりと
あつたなりん物もいとほしき物なりと

あつたなりん物もいとほしき物なりと
藤原義定

我が心もつたなりん物もいとほしき物なりと
吾中より力て心もわく物もなほ盛んなりとみて

ふもゆけり 平兼盛

あつたなりん物もいとほしき物なりと
あつたなりん物もいとほしき物なりと

あつたなりん物もいとほしき物なりと
津守國基

あつたなりん物もいとほしき物なりと

はつさやうふらぬく歎ゆけり女はあふはりの
とらあり

中原基長

わさめのさつこふらぬくあふはりの
さうありゆけりじまきよふとある事ゆりて
前々後後よびさうけりさう君さうさう羽為件
物後のまことにゆいさうさう

源慈俊母

あつる雲あふあふれ進物まらりたはささうあ
小一條院東宮と兼こえきり時行さうゆけり
あつるに火さうさうあふとこゆりさうとみえさう

あゆ

坂河女侍

雲あふささのゆりさうあふとみえさうあつる
同院あ高松の女侍さうさうゆりゆりゆりゆり
さうあふささあふさうあふさうあふさうあふ
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう

あゆ

源道深

あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう

あゆ

藤原為任朝臣

あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう
あふささあふさうあふさうあふさうあふさう

事ありてとらぬまゝに下けりしなりと申す
中納言隆家

母中納言氏母カキいしうらあやあまきうたけしふ孫カキながら
九月カキ廿四日カキよりけり人のことしつこき

小年

今もそとあやあまきうたけしふ孫カキながら
辨範は師八幡カキよりけりしつこき
てその年ありし月カキよりけりしつこき

藤原道隆朝臣

九月カキ廿四日カキよりけりしつこき

西

大貳三位

郭カキよりけりしつこき
二禮とまのカキよりけりしつこき
られしつこき

素意法師

すめしつこき
丹後守カキ保昌カキよりけりしつこき
和泉式部

西宮カキよりけりしつこき

竹分あはれ家の家とありてよえよえのけり

惠慶法師

松風をきくうい故をうらむふじうあはれをきくわ
二降りまじりてあはれまうちる日あはれをきくわ
てのりなまじりてあはれまうちる日あはれをきくわ

小式内侍

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ
あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ
あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

かき

東三降院

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

伊勢大物

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

小久志

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

あはれをきくわあはれをきくわあはれをきくわ

口くおぼえしむりてはまひしむるまらたにこれなり
ついでつうしきり

まうおぼえせむりてはまひしむるまらたにこれなり

或人云く女經獨執前書ふくゆけりまひしむるまらたに

まら人のあひまじありまらたて女がく女はこれ

經獨執りまひまじまてまらうらまらたのまらたに

まらたにまらまらまらまらまらまらまら

存中つ祿をくゆけりまらまら

和泉式部

おぼえしむりてはまひしむるまらたにこれなり

まらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまら

存中まらまらまらまらまらまらまらまら

ついでつうしきり

坂河右大臣

つ祿りまらまらまらまらまらまらまらまら

か

中納言定頼

單の紫まらまらまらまらまらまらまらまら

世中は祿をくゆけりまらまらまらまらまら

ついでつうしきり

赤澤清心

ふゆの流を来さくちのきんちつとせは地ひるふ
経のよせうり日くえて右近馬場のうへに
約けり
増基法師
いふは花のあをぬきてうへに
かき
中宮内侍
上東門院あふふのせはけり

あつたにさういふ中とらぬ
藤原長徳
馬内侍

かめらのあはれぬ
頼家朝臣せを
律師長湊
いふは花のあをぬき
かき
中宮内侍
上東門院あふふのせはけり

選子内親王

高清成頼をたしむるにふあさ家とありて
つらとせしむる

續人不知

伴鋳大輔

後一條院うせし後院をせ中よりくむるに
は神よぬく横川よこもりのてゆる以上東院
前中納言顯基

せはすそ病とありて身あれも程なりき昔ありたり

以上東門院

せをたしむるにふあさ家とありて
つらとせしむる

前大納言公任

なほいりる人まありけり世中にいれを伊つとせしむるに

三條院春宮とすけり時は神よぬるぬる文成り

藤原統理

若小公を道れありしをたしむるにふあさ家とありて

三條院御親

以上

わきま運法にありては人となりて我もあは
は神に成るすれはけり前よ極楽嘆くはなりと
見て
前中納言義懐

乃一人の心ありするはよあはれもなきは言ふれ
世にそひきて長言宗にのけり入道中おれり
ふもまことすれは神にありてはなりと

お久納言公任

世風よたも運法といふはたんをいふなりと地を
良運法師とていふなりと

東意法師

みまゐるに四の法ありてすまをよ月の教ありて

かあー
良運法師

神てや月をうりてはたもあはれなりと
良運法師とていふなりと

春東四房

なほなるなりとあはれなりとあはれなりと
とよまの心ありては神の心ありてはなりと
ふもあはれなりとあはれなりとあはれなりと
はなはれなりと

法師胡範

なほなるなりとあはれなりとあはれなりと

長樂寺にすゑのけつらるるをふとてしんせつに
約守道にけつらるるあり

上東門院中将

あしき事いふるをいふるのあはれをいふる

後拾遺和歌集第十八

雑言

別之胡后ありといふらの國よとてをいふ
乃松と凡そよふ人伝やう

橋季通

平けさの松二本とみかこくささけはなまといふ
乃られふもあこいさるてのられすいもあま
乃松もゆりりされはよあれ

結固法師

武隈のまのいふるをいふるをいふるをいふる

河原院と積約り

大江嘉言

里人のくじふまはななり
忘井の清みくおのり

松より前光松をよめぬ

江の原

手いり松ふなくはあきら
まきす人のゆりまら
松のこゝろをみよめぬ

左衛門少方

六條中務親家
松とてゆきまらみ

身由りてむらうの書を見く積約り

源為善朝臣

松とてゆきまらみ
松とてゆきまらみ

馬内侍

松とてゆきまらみ
松とてゆきまらみ

大藏卿

松とてゆきまらみ

永義四年日裏高合よ松をよめり

前々幸叶資件

定代所の志風よまきと松乃をりかろくさるり

う魚のよれこも松間底よれいりこいぬをこつ

こうまろりらよ 今上御製

前代志林をもちてすたにさる葉のぬきり定代松を

類不知 藤原義孝

源の末を移りたもて中宮のめむらと海にをえり

宇治あく人くさるり人ゆけり山家松宿より心を

氏記の経信

極待すり宿の心よさるり種く宝木ありくく人あり

開白前々政大臣あまてかひもこの池よめりゆり

存永範永約臣

鳥もめでい毎魚めんかつもい池ふたのわたりあえり

次平浦とよめりゆり 藤原経衡

魚のたかりもこの娘をまきひく定りもあつたに由井浦を

龍門遊舟 中御言定頼

く数人もちにわたしの遊り系はあれわくを由せをゆり

をよひの月よ龍門よ海らく遊りたりてあつた

かえ義忠よりあをゆりたりてあつた

よせり

年乳母

物いともこのものを枕のよれとせりあつた遊のちり系
 美作守あきゆけりたにそり乳母よるを水たいた
 してよかゆきり
 藤原兼房朝臣
 せり入る名をえりてこまゆもきと次方今遊乃系小
 大覚寺の遊取とてよかゆきり

赤深清心

やせいしきりふた母かり遊にせつと屋くそ今方今り方
 はゆりまよりくく人ゆけり

深道深

手いしきりふた母かり遊にせつと屋くそ今方今り方
 かせりちりあましくゆらりてちりあましくゆらりて
 してのりあましくゆらりてちりあましくゆらりて
 しくゆらりあましくゆらりてちりあましくゆらりて
 しくゆらりあましくゆらりてちりあましくゆらりて

急主情親

またあ日あつた此宿をやせりあましくゆらりて
 修理大史堆信法守あきゆけりたにそり乳母よる
 目下はけりあましくゆらりて
 けりあましくゆらりて
 けりあましくゆらりて

延久五年三月廿七日世孫久人よ御中

恒守

後三條院御歌

恒守の神もあはれとてなす人じのしと舟と舟とてなれ

氏了卿經信

なま風吹よきしれ恒守の松のまの枝とあゆむる浪

花山院の山もふ徳野よまのり恒守の道も恒守

よきよき恒守

急度法師

一とたり此の風も吹ぬしなまのいあはれ恒守

左大将時平人うしなまうて恒守のまもてよ

恒守

存永為長

恒守と母のうた地と恒守のうたのうたのうた

恒守よきしとて恒守のよき

平棟付

恒守つとて恒守恒守此のうたのうたのうた

恒守のうたのうた恒守のうたのうた

恒守のうた

源頼實

恒守のうたのうた恒守のうたのうた

恒守のうたのうた恒守のうたのうた

恒守のうた

堀基法師

恒守のうたのうた恒守のうたのうた

挙固和泉の仁とてゆらののりまに
くろくひのきり代位若くすつとまといふ人ゆきれは
くちまありとて書ついでり

赤深赤門

そのことへ久しくなり代位若くすつとまといふ人ゆきれは
上東門院位若くすつとまといふ人ゆきれは
かゝりせ抱いさるふく人ゆきり

上東門院新宰相

於て始りそに代位若くすつとまといふ人ゆきれは
天王寺よ飛井よとよまゆ

弁乳母

百代とすうかみ井のあやとほる人のとらなるれあらん
なうら橋あくく人ゆきり

前入納言云任

く櫃あきまかほあれとの若代とえきうあれと見ま
えまらにしまつとてあうら橋をみく

赤深赤門

赤はらりま橋はらふらりあふれとえきうあれと見ま
上東門院位若くすつとまといふ人ゆきれは
ゆきり

伴勢太橋

いぢりぢり身と名を道に仰りて此橋を方不

錦浦とて申す 道余法師

若ふう紀ふいし浦ときて道に仰りぬあふいしをり

徳勝にまじりて日坐すいしと仰けりといふを

いしをいしと仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて 増基法師

山が守りて流るる水はよりのつらき水なりといふ

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて 藤原孝善

仰りて仰りて 藤原孝善

わが身はつらき水なりといふ仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて 読人不知

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて仰りて

女法こほ

その一 實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、
實方じつかたの娘むすめなりては、

讀人よみなり

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

藤原實方ふじわらじつかたの娘むすめ

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

よきなり

赤深清門あかふかしみ

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

惠慶けいけいは

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

紀時文きときぶん

おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、
おのねのいふに、

清原元輔きよはらげんすけ

かへりきし昔老人のむつとては来てをせしむるを激し
家乃集れしとて小書つけとてりきり

意王物語

花の志は紅葉の志は葉がきしはめて木の下にやらむと
作持の物語集と人の心よとて存てゆきり

七寸とて

康資王母

毎に秘しはるるをて花がきしとて昔は若おとてつとてり
後三條院に時月ありとてり秋人の心はよあり
しては後人へてゆよ人の心はよありとてり
よめとておとせまゆとてり

後三條院越前

いしのかろ風をうけしはれがはるは花らの心を
七月とてりふとてり女房月久ふりありとてり
死にて後清が納めとてり神よありとてり
あいつとてりいゆきりを九月はとてり
あつてはとてりうかたよとてりつとてり

後三條院以和歌

秋をよふとてり花やらのよきむとてり秋の月はありとてり
義忠別後おとてり女のおとてり女よとてり
よきとてりつとてり

赤深水

母の世とて推しの月をみかよふにけりてあはれに
かこむとてしとく道余は神りてしはまうとて
かゝる人ゆけり 後人不知
きよもんをぬきぬきせりてあはれに
らた前よゆけりよとてゆきまをきれた村と女と
まのまこいりてあはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と

親子因縁主

良運は神也といふにあらざる人よあはれに
あはれにゆきまをきれた村と女と

教束者善

あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と

初泉或記

あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と
あはれにゆきまをきれた村と女と

六條祓院宣旨

とほひのまこととてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて

馬内侍

うるまひのまこととてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて

藤原顯總朝臣

まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて
まことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとてまことなるがふらふらとて

後拾遺和歌集第十九

雜五

後冷泉院元之方と申けり此二条院よりめて
さしせ給いそりし人ありとありん積ゆり

出羽辨

昔より白はむのいれおきとがむゆきの松たけの
二條院去まよまのいれおきとがむゆきの松たけの
かふとれの申置つこふとれのいれおきとがむゆきの
さしゆりゆり
大貳三位
志はひのいれおきとがむゆきの松たけのいれおきとがむゆきの

かあ

出羽弁

昔より白はむのいれおきとがむゆきの松たけのいれおきとがむゆきの
後冷泉院元之方と申けり此二条院よりめて
一おきの女床しむりさしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
さしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

源為善の伝

花より昔より白はむのいれおきとがむゆきの松たけのいれおきとがむゆきの
三條院春まよまのいれおきとがむゆきの松たけのいれおきとがむゆきの
さしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

入道前々政大臣

義代とあるゆゑなりと新にいふ方にはりえの志願は

四也事

三條院以製

ふしつちの来由なりとあるまふ事いふはつちの事なり

弋人云ふ所はた人將淋時より母りり以てなり

光のゆけはなる事なかりとおやなりとありあつたま

しなすはなりしてを括するなり

一條抄政之通ゆくりなりと納言初成じまればなり

七条よむしとたむいしてくく人ゆきなり

法住寺本政大臣

為文

ちふしつちの事いふはつちの事いふはつちの事いふは

六條大臣は男ゆりてはら攝摩國よとありてゆけり

言抄のりてゆくりは高砂なりとありてゆけり

是の事なりといふはつちの事いふはつちの事いふは

源相方朝臣

字の初となくつし昔きつてはつちの事いふはつちの事

後一條院にたきくありゆりなり時つちの事いふは

はつちの事いふはつちの事いふはつちの事いふは

字の初となくつし昔きつてはつちの事いふはつちの事

選子内親王

光のゆけはなる事なかりとおやなりとありあつたま

かあり

入道前右大臣道長

もあつて二番ありてを考よくあはれ給の事新ありん
後一條院御時空ある事幸ゆけり母上東門院御
母のせ給くは空野よりかありせ給く又の朝来
こえを新あり

選子内親王

乃中にもかも此のあかき事さにてらやふとを約あり
後冷泉院御時上東門院よ中こあはしとあけつと
そまらしてつらうらり願ありとこれさといふら花
とよまきとまのせ給くは此の事よとあせといふふ
尺のりり

上東門院中將

み業の母はあせき今とて本志持ちて改ありり
小弁祓院よまつりてはあふりありらうとい
とせきくゆるはあせよ

一條院宣旨

中意てあせといふ本のるもかり月はあはれをめて
宇治前右大臣中將ゆけりあはれ言白はあはし
てあはれゆき又の日雷ありゆきり小入納言といふ
あはしといふら

入道前右大臣

わあはし言白はあはしあはれ言白はあはし
かあり

前入納言公任

勇越つて不月つゝあれたる者もあきまりの程ありしなり
二條前左政大臣少将よゆけり時去日たはしよゆ
日く又り日暮れいしうきゆきれい道前左政
大臣ありしにいつくしん

今いし山よりあつきの林ありあつきの山にゆきと地
と東門院長家氏初つり二條の山よわき世はき
る比よふしうふ初幸ありてられたるあつきの山に
まうりいし山ありし地うきせき磯のりうりあつきの山
ふらとよきまいつせうと作ら道たれあつきの山
日よかていつせう

伊勢太極

色づりかたの者はあつきの山にゆきと地
家をふしうふ初幸ありてられたるあつきの山に
冷泉院東宮とゆけりあつきの山にゆきと地
いし山ありし地うきせき磯のりうりあつきの山

源重之

年をふしうふ初幸ありてられたるあつきの山に
春かいらあつきの山にゆきと地

花山院御製

まをふしうふ初幸ありてられたるあつきの山に

三條院の時大嘗會汚穢をすすはしのはるあり
ゆげりよとくにすり人のゆげりかむ拜のありれもいふ
つりつてきり
伊勢大物

ふふいふいよみれたを飛あてをうかひあひあひ
かあし
か將井后
とやん

そよ山にすゑをみくは侍つうかひあひあひあひあひ
一條院うせも御おとと東門院はよ出をせはきり
その年あひ良はる芳はなひいてうのどは
ともひ来つてまのゆかり中よふかしく特はる

伊勢大物

とくか山井あ水若うどかからりけり
中納言實成宰相として其良キをよつりきり
と弘徽殿女侍のをいゆる人かつ来よ出らる
中まのいれ人よのふまてて人のきひ百あ
なかりあみくをらひ程をあらねむなはたとい
て籠あといよらるひれあまに母あう病ひはかり
あしてはくふひひのかつなをひひり
物とあてといあてかの女侍あうか母ゆかり
とせくといあて左京のいれをいふい
とせくといあて日ゆいせうらり

後一巻

おろりしよはまゝ人うわまそちるれいけと家とそらん
かそ時時の象よぬく二條前を政臣中ねと書
使三伯けりふあり一節のさふらむらう一ちん子
りかうういここのれおかかぬし軍て所ひ申え
めはわかを道へまひひいこありそくろのふ
あしてはたのりきり 藤原長能

日ひあかしく影まうしんまもれ終るらぬそのを
なまのち長よつとのかさるうらうらうとあは
あはしりとあうあういもかこはけらまきりよあは

かたのうにいんくむいひつひをゆけり

選子内親王

袂たりすまの衣といひうそみまのくもあつと来ぬ
一條院御時皇后右文女良きあせ拾けりあういつく
ろいつくうとけりまきり人のつそそゆきりあひもを
まひくふまじとひをゆまてむいひい
てよるゆり

存厚實方朝臣

あつめの井あおひをむらとひりなりひもろさゆあは
あつひゆるり女れお良よてこせ人ふとまてゆき
まじつりきり

源頼家朝臣

由もあらずしてかきしりしむるにあらはれしむるは
人よりいさうせんを契くゆひの事とていさうのめい
ていさう人ゆつ業ゆよきれいよあは

法眼源賢

なごきあひまゐりていさう人のゆゑの氣をまじ
らむきよめなり女とすかゆけりうもいさうあ

平正家

いさうなりうのいさういさういさういさういさうい
一條溪河時大武作理けりいさういさういさうい
めいさういさういさういさういさういさういさうい

とて書はくいさういさういさういさういさうい

源重之

勢といさうの相とていさういさういさういさうい
なごきあひまゐりていさういさういさういさうい
成順りういさういさういさういさういさうい

中お后

世のいさういさういさういさういさういさうい
いさういさういさういさういさういさういさうい
いさういさういさういさういさういさういさうい

友原基房別傳

二つは浦よこ多しふらぬのあけしこらあつらあけり
頼国朝臣弘伊守よるけつ時いぬと事ありてま
るくゆきうはにこけふ物むいりりかえと見
ゆきり
連船いゆ

光り浪やこ人といふもまらぬをわさる浦中は
肥後義清なるゆきこの北とう程のむい
みまといいとむてゆきりうの事ふつらう

源兼長朝臣

うらじ道一物をもとせぬ秋の空の事えむといふか
あまふゆきうはうはにたらしよひんはらう

源兼俊母

白いも花うとれあつまらよられあつまら風よき
かあ

康資王母

吹ふとられえいあふしき都乃花のさうとあま
はうらあめんそとこいしうらけら母ならり
菊のぢりうくゆけらとえく

大貳高遠

とらつえ我身よ露やとれんむらき花よあ
みられあゆきりに中將宣方朝臣のそといつ
うきり
春永實方朝臣

包してなむりありきはありてその地とてありの
わらじらうりありてなむりありてその地とてあり
と云ふことあり

からぬのありありとてその地とてありてその地とてあり
實方期長なるのふゆけり時けりてあり

大に匡衡の長

能ふと云ふはありてその地とてありてその地とてあり
かあり

存京実方期長

つとむぬりのありありとてその地とてありてその地とてあり
はの國がかりありてその地とてありてその地とてあり

まゝに京にありけりてありて人よかりてあり

赤深清の

ありてありてありてありてありてありてありてありてあり
六波羅といふ寺ありてありてありてありてありてあり
糸のありてありてありてありてありてありてありてあり
相摸

いふことありてありてありてありてありてありてありてあり
るふことありてありてありてありてありてありてありてあり
竹のありてありてありてありてありてありてありてありてあり
伊と云ふことありてありてありてありてありてありてありてあり

いひたれん

和泉式部

かゝるに成まらざるにやれぬものぞとてはせむいふに
山階寺より信養具からう宗派前と改之旨のたよ
つらうきり

坂河右大臣

うら海の小いさししみさしとてあはれもくもく
山内ふさなるてうぬるみりよ家經り西八條
家らういさきて車を冠入る人ありさげり
難ぬまらぬの公をれくむけりくゆけし
とこいふぬわたりつをゆるり

伴峴大納言

こも枕より花のよあつとやらの花前
山内里よまらうて日くたよ

源頼實

日をもぬくもるぬはらうの巻くはらて
伏見といぬ町よ宗隆文の女房所まてあはして日
くもぬきたしうぬんとてゆるれ

橋俊徳右大臣

都人ら後、ゆきくぬらひ市乃の道其者よまじり
かゝる婦人のいふ年ころあつてまらぬいふら
あしうらまやありさむしよるゆり

後人不知

杖をすれ言にじりあやめりかたむたのむらあめり
元へのは二月の五番とて花をよほく事ゆき
日えれをいんそ人のらふじのせくもり
それとじりこらあめり物すまひひる事を
あしせく

蓮仲は柳

なほあめり人あめりて花れたるにじり
あつ取よ庚申とゆきりふみとのらあめりあめり
なよとゆきり

大中後能宣朝臣

そよよきりよめり言ゆらめりかたのよとえきあめり

入道いふあよ人かたのあめりゆきりあめり
負りあめりあめりあめりあめりあめり
りといゆきりあめりあめりあめりあめり
かたのあめりあめりあめりあめり
きりてあめりあめりあめりあめりあめり
うめりあめりあめりあめりあめりあめり

相模

いけりあめりあめりあめりあめりあめり
人のあめりあめりあめりあめりあめり
あめりあめり

大中後能宣朝臣

そら梅とさけふはあつ昔の葉はうらひもふあ
は神のまにまにけりかたかへりあ

源重之

さしゆのぬらまは橋よりうらて池のほとりささいあ
人あかあふさしゆいさうあまてうらあかんさ
しゆらあま

藤原為頼の臣

もらあつあまさうんころあまあひらりあさうけ
そらあ家よりあひらりあまあひらりあさうけ
うらあひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ
まらあつあまの日はうらあまあひらりあさうけ

こせゆらうあまあひらりあまあひらりあさうけ

中務の具平親と

七重を花とさけふも山吹の又れはうらあまあひらりあ
清奥寺則之文秀人あてゆけあまあひらりあさうけ
さうひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ
あまあひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ
と人いせあてさうこあまあひらりあまあひらりあさうけ
あまあひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ
さうひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ
さうひらりあまあひらりあまあひらりあさうけ

清少納言

かつ素すのちとれありはるうにありとせりいふもやきぬを
駿河守因房と車ふれりておよ海らけり道
ちくの定季のはりありそくふとふ車らたせ
ゆれいよあふ

源頼俊

あふら孫とふりてとれをふりうにはははくしてとる
はふはうり多ていりの回よ海らそるらふさ
ふいと良羅は神めとあひく若草事といとていぬ
きせいよあり

慶範法師

なまふふりひりたを建定ぬさひよ海らあり

はくしらのありて道雅三位のわらふと杉きん
といふれはきりていさふすぬさひり金刀を
ふなすといひくよあ人のあり

師内大臣

あふらふは道にまれともあふらねをこはく成よる
前伊守義孝の法衣と改大長れじまよる
そらとまてはひらうとる

天台座主教圓

あふらまのまゆりあふら孫ともまがまきとらとる
はくしあひらけりはははははははははははは

存原のりぬ
とまねくもかひなきまゝあはれはらひつゝもわが身を

後拾遺和歌集第二十

雑六

神祇

長えの年六月十日^チ日俣れつゝの肉交よらり
てゆるり小俄よるり風あはれつゝさあつゝ
託宣して急主補視とありて不田やあはれ事お
とにせしまけけ所并よすしつゝのみきりして
かろけけねと次とよませねきり
ゆら来小島うらたねのみなせ運ちりあはれりあはれと
河和をりけり 急主補観

はるかにいひしむるに
たゞにいひしむるに
はよむるに
いひしむるに

和泉式部

物なほはるかにいひしむるに
いひしむるに

あつたはるかにいひしむるに
いひしむるに
て和泉式部
や中といふに

いひしむるに
いひしむるに
いひしむるに

和泉長徳

いひしむるに
いひしむるに
いひしむるに
いひしむるに
いひしむるに

和泉式部

和泉式部

いひしむるに
いひしむるに

任者乃まう流りの日書つけのきり

山口重也

すんり此松をがらぬはかふじし此ちうめは
一際院以時うらめて松尾新幸のきりふこふこ

ちつら梅のりらめ 源慈澄 後

ちもやう松のたはらうけい金公ふえあせれうあ成り
後三條院以時うらめて日吉社より新幸のけりあつ
まわすいぬてぬこちにはせ事もよく積り

大貳實貞政

あきつひに日吉の社にありあ山ありあうらうの代徳

わろい所祇園より新幸のきりにあつたあは
こふ一末ちううのせられいよあり

藤原経徳

よやう社のうらけりいれに松うらめしうああり
大東野系の上りよそさうりてゆるきにきりあく
きんら越えくあり 治の伴房

あの本榮よあるあうきまてあうり社のうらめしうああり
式部右衛門資業伊予守あくゆけり時かの園城
まのあ社よあつたあはしとてまのきりあうああり

徳田法印

うし候は所より衣しききりそむ神也とのふ
大貳成章肥後守中へゆけり時おたりの社
以装束よりゆけりかゝ四の女れりこゝりきり

読人不知

下らうし神のみと所道はゆきけりそむのめい
八幡よまゝりきり人ゆかり

増基法師

うしあしを口へ出さむし清み神のさるるとそむ
すかんくこれよまゝりきりよまゝり

連仲法師

佐吉の書れとけえり神さひくむり男中あひむ
石清あままつりてゆけり女の秋の木ついに佐
ろ社とてゆけり道八社ろろ書つけれ
きり
讀人不知
しをよの宿はかろめ佐吉れおし松よかりふらりる
貴初よまつりきりこれよまゝり書はきり

藤原時房

お事すけり所るんは神すれききりよまゝり
後冷泉院以時右女のお合よまゝり素をよかり
春原範永朝臣

空海三心山此鉢をせあめつにぬるえとて
釋教

山階寺の涅槃會よまうとてよ久のけり

光源法師

ふりつるを^キあつりともつてぬるなまのほし

前律師兼暹

つねらもりのあそはれなる新つみお娘と存て

二月廿日^チ申すころは仔細を痛うりよふりつる

慶範法師

ふりつるはよりの月を^キ申すころはとてとていりつる

かき

仔細大物

そはつてつる月を^キ申すころはとてとていりつる

二月廿日^チ申すころはとてとていりつる

讀人不知

山階寺の涅槃會よまうとてよ久のけり

二月廿日^チ申すころはとてとていりつる

山階寺の涅槃會よまうとてよ久のけり

仔細大物

そはつてつる月を^キ申すころはとてとていりつる

二月廿日^チ申すころはとてとていりつる

山階寺の涅槃會よまうとてよ久のけり

うきうきと舞いこいふつらうもれいともさくゆらりて

弁乳母

いそぎよとのとれおんはとれそく九ちよまてらるるつ

大皇太后を五節大系経信養世と稱はせりよは親

經よわたりそら日よあかり

康資王母

まはるまはほのむよとくおやをうと衣のむとちりて

灰古御所右大臣女房車よのよあしおりのまは

舞よとらりてゆげりふあかりなれよとの車ハ

染ふらふま一乃車よおりの方人舞よあひてのり

ゆいけりかろもといつらうら

後人一乃次

ちりてまにのの車よおりのとむさく一味の毎よあふ

月輪觀とよあり 僧都實証

月よふ心をかきゆらるるらうらりのとれなまよひる

維摩經の十略の中よこの男ハ色蓮花とてよ

とよあり 前大納言云任

風よけいまるをささぬる葉よ紫いよさうわつあつあつ

同論中よ此身水月のこさうとて海とよあり

小辨

つねのふらふら、水あつ月、夢やせし十九、今も年をばはら

三東唯二の

伴侍賀少将

ちり花をばりしは、こころ後世、ふらふら此の如く地を感ん

地地唯二の

赤深清門

うらそてかりの夢、ふらふらあはれ、ゆゑのふらふらとては

康資王母

たはたをちゆかき、こころあはれ、しほふらふらとては

丸百弟子の

赤深末の

衣たふむとて、ひくくふらふらとては、たうたう、たうたう

寿量の

康資王母

うらふらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら

普門の

前々細言云任

をばとて、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら

書書馬馬聖聖人人織織線線經經信信養養之之けけふふ人人くくああままるる布布施施

をばとて、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら

ゆりけ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

けの国がふらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら、うらふら

誹諧哥

歌々歌

読人あらば

節の巻、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

楊子通法奥よとてそけいまの松とあふれ
ゆるふもこの木の松と人こころみきてこころよ
續てゆるふとほしていきとてよあは

僧正深賞

そこの木の松とよみこころこころよあはれ
源道秋

あつこは梅と人の心もやううあつこはあつこ

右京實方別後

まじぬ花もあるとあつこあつこあつこあつこ
隣りうこの三月三日桃のそれとこいころあ

大江建能

桃つこあつこあつこあつこあつこあつこ
三條右政と長あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ

藤原實方別後

あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ

和泉式部

なほこころつと結とあとの葉とまらにさるえらつ
ひらくしくゆるるふまはわもうせぬとあひて
くのもいさうらとけらるる抄のゆるるも七月廿
つらきり

印太右文法奥

あのかすねまらるもとまらるるやまきむつらと
小隆院入道と政長らわつたつらとらとらと
まらに紅葉とく人ゆるら

坂川右大臣

紅葉のあまきよみ中まらるるあふとまらるる
紅葉のあまきよみ中まらるるあふとまらるる

紅葉のあまきよみ中まらるるあふとまらるる

塘基法師

わらわらるるまらるるあふとまらるる
人らとまらるるあふとまらるる

續人不知

あふとまらるるあふとまらるる

天台座主深心

あふとまらるるあふとまらるる
法師のあふとまらるるあふとまらるる

和泉式部

これらもつと種わけの扇の形なりなりと金工を
題する次

ほめて毛糸のまねをいふに似たるは種分けの
七月より八月のうちにきりぬき女房をいふに似

少将義孝

わねもあつた物といふは月車よとく人あつた
三隆院の時うぬわのいふとそらもわけり人種を
いふてまゝとせられおきつけぬとあつた

あり
小文を

さうもたはあのみとさうも種くうまううとえを枕を

人の事合しやうふあさかたは草にわをせら
母かた草からようもは

友人とる次

まじりあつたあつた物かと種まの毛刀せきさうか
入道抄政うましくあつたにうまいわけり以帳の
うまはいゆたのわよじといつた事うらなはと
目しあてさうふとせきとわけまはけりうまはえ

大納言道徳母

なまの事あつたいふえつたといふよそはあつた
の長門といふまじりあつたにうまい物とあつた

徳田法師

あつたのちりなうくふきつかりころは書ものころは
うたひむじもてまうて来らけり女あらのりそく
ゆきれよあり 大に馬場朝臣
えらあもなひまうるらもあてはせのあめちたむ
かあし 赤澤清門
あもあふは書物もくやわくくふいそりふりてあは
くらん

授字云

四米云之

長兼三年正月十九日ハ礼部 納言之自筆

本書来

件本奥書云寛治元年九月十日為校勘世間

重申下流本授之

先是在世本相遠寄三百餘首不可作用件本

其由奥書同録序

通俊

寛元四年三月日ハ藤五相本又授之 互判

文應二年二月廿日ハ為書 錦心ハ本書字来

公朝

于時寬正二年^{辛巳}二月晦日玄寫

法眼即慶

此集書寫之謬多為之條以較本以授之僻書
相凌之處汝正之雖於於漏版不足信用若欲

寬正二載 南呂日記之 立判

身集三年二月十九日玄寫 名於十四日

授本云

永享十一^巳年十一月廿一日

初集集作本

善左衛門尉元秀書之

于光緒二十二年八月廿六日

...

...

...

